

VI 先端をゆく商業建築：楽しむまちミナミ・心齋橋 とその周辺

町衆のまち・船場に対して、ミナミは商業のまちという明確なアイデンティティをもっている。近世には、道頓堀五座と芝居茶屋で構成されるエンターテインメントのまちを起源として、南地五花街（宗右衛門町、九郎衛門町、櫓町、坂町、難波新地）といった遊興街としての顔とともに、心齋橋筋には松屋（大丸呉服店）、十河呉服店などが軒を連ね、買物のまちとしての顔も持っていた。こうしたまちの構造が、今日の日本を代表する繁華街であるミナミの礎を築いている。

その商業のまち・ミナミのイメージをより強化したのが、百貨店建築の集積だ。近代という時代に呉服店から百貨店という業態へと競うように転換をはかった流れのなか、[大丸心齋橋店本館](#)（1922年：ヴォーリズ）やそごうが心齋橋に店を構える。この動きは、梅田阪急、南海難波など郊外ターミナル駅周辺にも広がる。当時、御堂筋（1937年竣工）とその地下を走る地下鉄御堂筋線（1935年竣工）の工事が進むミナミでは、難波駅と一体的に計画された[南海ビル「高島屋大阪店ほか」](#)（1932年：久野節）、当初は松坂屋大阪店であった[高島屋東別館](#)（1934年：鈴木設計事務所）と、その豪華な装飾と近代的な設備を整えた百貨店建築の集積が進んだ。そして、カフェやキャバレー、映画館など、様々な新しい業態に対応した建築も生まれ、ミナミは都心・郊外の住民が買物・食事・映画・芝居で一日を過ごすというモダンなライフスタイルが確立していった。

こうして、都市型レジャーのまち、新しいものが生まれるまちとしての地位を確立したミナミは、戦後復興期を乗り越え、高度経済成長期になって再び勢いを取り戻す。カフェに対して酒類を扱わない新業態として発展した喫茶店・パーラー建築である[純喫茶アメリカン](#)（1963年：富士工務店）が生まれた。少し場所は離れるが、同じく流行先端地であった新世界では、現在ギャラリーとして活用されている、建築家石井修が独創的なディテールをこらした喫茶店[再会](#)（1952年）が誕生した。

また、当時としては画期的な焼肉レストランの[食道園宗右衛門町本店ビル](#)（1968年：生山高資）やモダンで奇抜なデザインで地下にキャバレーユニバースを備えた新しい複合商業ビルをつくりあげた[味園ユニバースビル](#)（1955年：志井銀次郎）など、時代をリードする業態の先駆けとなった複合商業建築も登場した。

繁華街としてのミナミは、やがて先端のまちというイメージも獲得していく。村野藤吾がそのファサードデザインに全力を注いだ[浪花組本社ビル](#)（1964年）はミナミだけ

らこそじっくりくる。

大阪を代表する建築家・安藤忠雄が主に 80 年代に手がけたのも先端商業建築だ。そのいくつかはガレリアアッカ（1988 年）をはじめ、ミナミに点在している。この頃から、まちの先端性や流行発信の拠点としてその魅力が注目されはじめ、建築がその象徴としての役割を担うようになっていく。ミナミ・心齋橋からその動きは、アメリカ村、堀江へと周辺に広がりを見せしていく。堀江にある**オーガニックビル**（1993 年：ガエタノ・ペッシェ）はその奇抜なデザインで、まちのシンボルとなっている。

このように多様化をみせつつ、次々と新しいものが生まれ、代謝を繰り返す先端建築のバイタリティはまちの魅力と重なりあって、広がり、厚みを増していく。

大阪球場跡に建つ屋上庭園をもったなんばパークス、グリコネオンが水面に光る水辺遊歩道のとんぼりリバーウォーク、百貨店建築の代表作である南海ビル [高島屋大阪店ほか] のリニューアル整備など、商業のまちミナミはその回遊性を高めつつ、さらに楽しむ都市として発展を続けている。（嘉名光市）

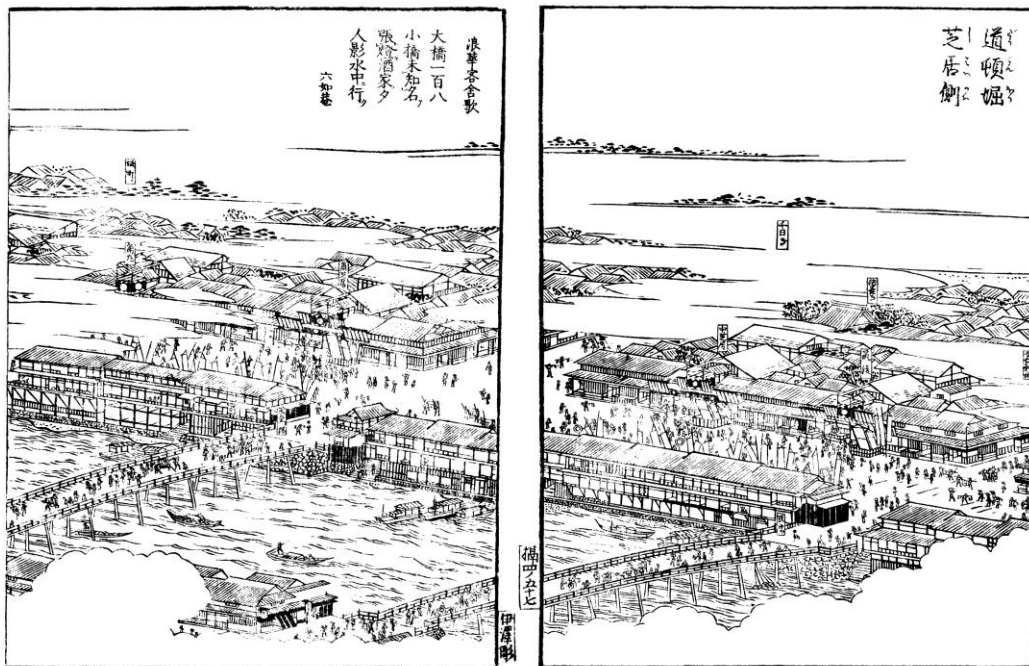


図 道頓堀芝居側（出所 撰津名所図会）



写真 道頓堀 (出所 大大阪の展望 FINE VIEWS OF OSAKA)